嗚呼・悲愴なり
「国川丸」の最後

愛知県　北村重雄

私は兵庫県多可郡日野村（現　西脇市）で、大正十一（一九二二）年二月二十八日に五人兄弟の末弟として生まれ、七人家族で楽しく暮らしていました。近所に春日神社があり、杉原川という清流があり、杉原紙（和紙）が生産されていました。どこにでもある至極平凡なのどかな田舎でした。

父は菓子の販売を行っており、各地の大祭や祝事に露店を出していました。近隣の場合は、若い衆に種々指図して場所割等を取り決めていました。話の内容も業界用語で独特の隠語があって、一般の人が聞いても意味不明でした。

私は高等小学校を卒業して、十六歳で大阪の道修町の薬種問屋に丁稚奉公に行きました。当時としては大きな店で株式会社組織でした。田舎者と笑われないように一生懸命に働きました。社長はじめ上司・先輩の皆さんに「北村、北村」と可愛がられながら真面目一方の男だと言われていました。

壮丁通知の五日ほど前に会社から帰りました。大阪に出てから初めて帰った故郷です。見る物、聞く物、皆懐かしく、田舎はいいなあと痛感しました。検査はこれまた懐かしい小学校の講堂でした。昭和十七（一九四二）年五月でした。約三十人ほどの友達が一堂に会し、越中褌一本で整列しました。正面に大日章旗が飾られ、その横には毛筆書きの五ヵ条の軍人勅諭が貼り紙してあって、幕僚を従えた徴兵執行官（姫路連隊区将校）が軍刀を抱え込むようにしながら、会場を睨み回していました。

検査項目は体重・身長・胸囲などの一般検査から、医官による、痔疾検査・性病検査・胸部疾患検査と一通りの健康状態検査が迅速に短時間のうちに行われました。このうち一番嫌いなのは痔疾と性病の検査でした。板の間に四つん這いにさせられ、椅子に座った医

官に向かって、むき出しの尻を突き出す屈辱的な姿勢をとらされ、またM検査は性病検査のことで、越中褌を外し（丸出し）て行列させられ、しかも医官に陰茎を力いっぱいしごかれるのです。当時は淋病などの保菌者が多く、特に厳重に検査が行われたように記憶しています。

全員の検査が終了後、一人ずつ氏名を呼ばれて執行官の前に進み出ました。「北村重雄、第二乙種合格」と言われ、即復唱して無事終了でした。その夜は家でいろいろと話し合いました。翌日は大阪の会社に帰り社長はじめ上司、先輩に報告をして、いつかは召集令状が来るだろうが、それまではと、一生懸命に働きました。年末の暮れ近い日に母から「海軍編入という通知書が届いた」との知らせでした。

正月休暇に故郷に帰って、海軍通知書を手に取りじっくり眺めながら俺は日本海軍の水兵さんになるのだと実感しました。が、私は船に一度も乗ったことがありません。大変なことになったと自問自答しました。少しでも予備知識を取得致さねばと、元海軍軍人に水兵心得なるものを教わりました。結果として「人がやっているのだ。俺に出来ないことはない。いついかなる時でも難関は自力で突破しよう」と心を決めました。

昭和十八年七月二十日、赤紙の充員召集令状が故郷に来ました。即日電報で大阪の会社に連絡があり、社長さんはじめ皆さんにお別れの挨拶もそこそこにして田舎へ帰りました。令状を手に取って一字一字を確実に読み取りました。「八月一日午前十時・呉海兵団に入団すべし」でした。前日、国鉄加古川線西脇駅で近郷の男と二人の入団で、多くの人にお見送りしていただき、有り難く御挨拶申し上げました。「吾れ滅死尽忠報国の精神で出発します」と。

翌八月一日入団しました。三日に入団式があり、水兵服の胸に「呉一補水四五五五　北村重雄」と書いた布片を縫い付けていました。広い庭に三百人ほどの新兵が整列しました。頭上からの直射日光で地面が焼け付くほど暑く、不動の姿勢でいると熱気のために倒れるような暑い日で、水兵帽は日除けがなく、麦藁帽子

は良い物だと訓示の間中思っていました。

壇上の隊長は「貴様達は本日、只今から光輝ある帝国海軍・軍人として心身共に鍛錬し、皇国のために一身を捧げて奉公に勉励せよ」と。引き続き教育係将校や各班長達の話が一時間ほどありました。同日から約一ヵ月間、「警備訓練」と言って警備隊に入隊し、特に陸上訓練「陸戦隊教育」を行い、海では水泳・カッター（ボート）の漕ぎ方の訓練でした。どれを思い出しても自分には苦しい訓練の連続でした。精神力では他に負けないと思いましたが、何分にも体力が限界を超越し、来る日も来る日も、ぶっ倒れる寸前までの教練、夜は各学科教育（操典範令）がありました。

面白いことでは兵舎が艦船のような構造で、眠る時はハンモックでした。また、歩兵舎を出る時は「北村二等兵、上陸します」と言ったことです。一ヵ月の訓練教育の次に出た命令は、九月三日山口県小松町（秘密地区）に山頂砲台が有り、「哨聴所特訓」といって教育がありました。内容は探照灯・聴音機・管制器の各兵科器具の取扱修得訓練と夜間の照明訓練および各砲台と連携・航空機捕捉訓練等々で、もって生まれた負けず嫌いの根性で頭脳と身体を全開して一生懸命勉強しました。

自分は特訓任務（特業）が信号兵として訓練され、一番初めに〝モールス〟信号の丸暗記でした。「手旗」は常時持参していました。十月二十日頃に呉の警備隊へ帰隊命令が出ました。そして次なる行動のため「待機せよ」でした。

十月二十六日、軍艦「国川丸」に乗艦命令です。「北村水兵、信号課配属」で決定（注・本艦は南方戦線で活躍し、目下ドックにて整備改装中につき、暫時待機せよでした）。

十一月三日整備完了、進水式。即、砲弾薬・糧食搭載、航行発進、関門海峡通過、日本海を通り舞鶴港に入る。ここで投錨、物資搭載、一泊。

ここで僚艦のことを申し上げます。同型の艦が外に三艦あり「神・聖・君・国」と呼称しました。即ち「神川丸」「聖川丸」「君川丸」「国川丸」で、何故に戦艦なのに「艦」ではなく「丸」なのかは軍籍が無く、

いづれも川崎汽船所属のためです。一万トン級の水上機母艦として活躍し、勿論戦艦として重装備を施していました。各海戦に参戦し、その都度一艦また一艦と海の藻屑となり、多くの戦友が護国の鬼と化し水漬く屍となられました。

「国川丸」一艦が僚艦の仇を討つべく活躍しました。自分は旗流甲板マストで、発光信号・旗流信号（この任務は大変忙しく、瞬時に旗を何流も上げ下ろしする）の任務です。

舞鶴港を抜錨して、路南下し、十一月十二日頃台湾高雄港に入り、即出港です。輸送船団十八隻（陸軍御用）の護衛に本艦の外に敷設艦「蒼鷹」並びに船足の速い小型艦艇（海防艦等）が数隻いたと思います。なお、このような時の軍艦行動を「之字運動」と言って絶えず進行方向を変更して敵を監視警戒しながら護衛の任務を全うするのです。

二十二日頃、ルソン島を左舷に見て東シナ海方面の重点警戒を行いながらバターン半島を廻り、コレヒドール島を右手に見てマニラ湾に入り投錨、五日間停泊しました。十一月三十日、本艦一隻でシンガポールに向かって出港、セレター軍港に入港しました。

十二月八日早朝〝総員起こし〟の喇叭が鳴り響きました。「今日は開戦記念の大詔奉戴日だ。一人の油断・不注意が本艦を喪失することがある。全員心して勉励せよ」でした。自分も一瞬緊張の上にも緊張しました。

艦は同日出港してバンダ海に浮かぶある小島に向かいました。出港後少し時間が経過した時「ただいま赤道真下だ」との声が流れました。そして少量の日本酒が配られ「赤道祭だ」と言っていました。東経も南緯も忘れましたが、九州長崎の真っ直ぐ南下した所です。

十二月十四日島入港。ボーキサイトという赤い土塊を積み込みました。「これが錫、アルミの原料だ」と説明され、貴重な鉱産物資ですから軍艦を使ってでも一日も早く本国に輸送するのだと言っていました。昼夜兼行で積み込み作業が行われ、十六日には出港し、一路日本に向かって単独航行しました。翌日また赤道

通過で「赤道祭」です。途中どこかに寄港したようですが思い出せません。

明けて昭和十九年一月十二日、神戸港に入り、外泊（上陸）許可をもらって阪神電車で大阪の会社へ行きました。官給品の食料品を少し土産に持参しました。社長や先輩に日焼けして一段と逞しくなった帝国海軍水兵の勇姿を見てもらって嬉しかったものです。物資の乏しい時代なのに御馳走で歓待を受け、翌朝は社長さんから「生命を大切にして御奉公せよ」と見送られて神戸港へ、翌日出港、神戸六甲山の山並みを後にしながら、南方戦線が激動しているので「再度日本のこの白砂青松の浜辺を見ることが出来るのだろうか……」と思いました。

一月十四日、横浜港に入港、即岸壁より荷揚げが始まりました。神戸で少し荷物を降ろしたのですが、横浜では全部荷揚げを行いました。三日間の半舷上陸休暇（乗組員の半分が上陸許可）が出ました。自分は関西ですから横浜の街でちょっと遊んで帰艦しました。

一月二十五日、本艦に陸軍兵員約二百人が便乗して台湾に向かって出港しました。途中より次々と輸送船が集結し一大船団になりました。この頃から敵の潜水艦攻撃が激しくなり、「敵潜近海に在り」の報が入りました。豊後水道通過後から、再三異常を感じて爆雷攻撃を敢行しましたが、船団を一時鹿児島湾に誘導し仮泊させました。

一月三十日台湾に向かって出港、敵潜に対しては充分の警戒を行いつつ沖縄列島の島影を利用しながら、二月十日全船無事に高雄港に投錨しました。翌日は船団会議が行われ、命令・伝達・連絡信号の確認徹底等を行い、自分達信号手は「規約信号を厳守すべし」でした。

二月十六日高雄出港、輸送船団は二十隻の大船団となる。航空機が上空より警戒してくれ、足の速い「松輪」が、前後左右と超高速で走り廻って護衛の任に就いていました。なお以前より同一行動の「若鷹」のほかに二、三隻の護衛艦もいました。敵の潜水艦が比島方面に重点的に出没の報が入り、バシー海峡は最重要海域である「厳重警戒」の指令が入りました。今回の

船団の中に捕鯨母艦の「日新丸」がいました。この船は最高速度が八ノットとのことで、ノロノロ航行です。地団駄を踏む思いですが致し方なしでした。

ルソン島の島影が目に入った時、ヤレヤレと思いました。左舷をルソンの海岸寄りにし、右舷は東シナ海の重点警備で全船を無事にマニラ湾に導入しました。この時は本当に嬉しかったです。これは神の加護か天佑かと北の方、日本の空に向かって手を合わせました。

兵員の上陸、火砲、武器、諸物資の揚陸を見ながら、我が「国川丸」は翌三月二日マニラを出港し、次の任務に就きました。赤道を通過してセラム島の南の前述の島の西北の少し大きい島です。ここはアンボン島といい、たくさんの原住民が集まり歓迎してくれました。大いに交流を深め、日本に対しての知識を広めました。あの時の椰子の実の水の味は五十余年過ぎた現在も忘れ得ぬ美味でした。約一カ月同港に係留しました。

四月一日、南ボルネオのバリクパパンに入港直前、湾口において浮留機雷に触雷し、艦尾の一部に浸水事故が発生しました。修復のために曳航して入港する時に再度触雷し、艦尾の浸水甚だしく、ために湾内奥部に座礁せしめ、不動の火砲陣地となりました。米軍機がこの日より良き獲物とばかりに連日空爆に襲来して来ました。「国川丸」も高角砲・二五ミリ連装機銃等で応戦しました。友軍機が銀翼を連ねて出動、敵B24爆撃機・B25戦爆機・P38ロッキード・グラマン戦闘機等と互角に戦い、撃墜、撃退をしていましたが、それも束の間で友軍機はルソン島やレイテ島の戦線に飛び去って行きました。

実に良く働いた「国川丸」もボルネオ富士の見える バリクパパンで最後を期すべく、重火器が焼け付くぐらい発射し、己が艦は蜂の巣の如く破られながらも応戦しました。この時点では前述の「神川丸」「聖川丸」「君川丸」はすべて撃沈されていました。最後まで残った「国川丸」もいよいよ終わりの時が来たか、全力を出し尽くして力果て静かに残骸を晒す羽目となりました。取り外すことの出来る火器は全部陸上に運

び、弾薬・糧秣もすべて揚陸し、全員で「国川丸」に惜別をしました。次の敵機来襲では必ず南海の紺碧波間に静かに眠ることでしょう。

航海学校の選考試験があり、受験結果は信号課見張員に合格、第二十二特別根拠地隊に行きました。ジャワ島スラバヤ根拠地隊港務部所属で信号所（望楼）に派遣されました。空襲は日増しに激しくなってきました。

昭和二十年五月三日、連合軍艦船約百隻湾口に来たる。これより連日強烈なる艦砲射撃が始まり、加えて空爆も続行して来ました。六月一日より敵は上陸を開始、撃退するも最後には上陸されました。この時点より第二十二根司令部へ連絡するも応答なしです。しかし港務部に連絡がつき「下山を命ず」で、信号所員八人を連れて山を下りました。六月二日でした。

迫撃砲の弾着の合間を縫って全力で走って通り抜け、施設隊を見付けて本隊の位置を確かめて、夜陰に紛れて行軍し、中隊に到着しました。ここでは陸戦隊となり、各小隊単位で分散して、戦闘体制を取りました。しかし全員には兵器はなく、糧秣や弾薬などの運搬分隊もありました。銃火器保持者が倒れた時は、その兵器を取って戦うという、まことにお粗末な軍隊でした。

六月三日、陸戦隊本隊・各中隊第一線陣地配置完了という時に、わが分隊の兵員二人が陣地を飛び出し、施設地雷に当たり、轟音と同時に肉体はぶっ飛ばされ即死しました。自分の眼前でしたので今だにその状況は脳裏から離れません。交代命令によって「一時後方にて休息せよ」で数百メートル後方にて休憩していたら、その地点を中心にして「たこつぼ」を掘れの命令が出ました。陣地構築です。地形を判断して穴掘りに専念しました。敵弾が着弾し爆発音が身近に迫って来ました。

自分は出所警備を命ぜられ、その任に就きました。下士官が長で兵十人程度でした。六月十七日前方に敵の遊撃隊（斥候）に遭遇、応戦すること約二十分で撃退でした。その敵の去った地点を見回ると数本の施設電話線を発見し、帯剣にて切断して帰る時に、一発の

敵弾が左肩から上腕部に貫通しました。前方に倒れた自分を見て戦友は吃驚して「どうしましたか」と言う。遠方からの狙撃ゆえに発射音に気が付かなかったのでしょう。その直後に幾丁かの自動小銃が一斉に射撃して来ました。匍匐しながら出所に帰り、三角布で仮包帯を行い、本部に戦傷報告に帰りました。

「後方の野戦病院へ行って治療せよ」と命ぜられ、気が付いて己の身体を見ると胸から腹にかけて血液の塊が付着していました。野戦病院はサマリンダにあり、米を三合ほど雑嚢に入れて、トラックに乗せられてボルネオ富士の麓まで送ってくれました。ここからは徒歩で行けと言われました。山道を歩き始めました。同行者は二十人ほどいましたが戦傷者ではなく戦病者で、マラリアや栄養失調や脚気、また風土病で腹水がたまり、全身が腫れて歩行困難という病人患者ばかりです。自分も発熱し苦しかったのですが、この戦友達と一緒に行動していては二泊三日の予定が一週間もかかるだろうと、心を鬼にして一人で先行するからと言って別れました。彼等のその後は一切不明です。

自分はボルネオ富士を迂回しながら一生懸命に歩きました。口の中で「サマリンダ、サマリンダ」と病院の在る所を呟きながら前進しました。途中には路傍に座り込んで食物を恵んでくれと言う戦友が何人もいました。一度か二度は一握りの米を分け与えましたが、自分の米も残り一握りです。心で詫びながら「元気を出してください」と蚊の鳴くような声で励まして通り過ぎました。飲まず食わずで赤道直下に三日もいたら完全な〝ミイラ〟になります。

六月二十一日、杖をつき重い足を引きずりながら粗末な民家の前に辿り着きました。ここが野戦病院で、数人の衛生兵と日赤の従軍看護婦さんと現地の看護手伝いの婦人がいました。軍医さんも二人ほどおられたようでした。当日は到着するなり倒れ込んで、軍医さんが自分の負傷を見て「貫通銃創・内部異状なし」と言われ、傷口を五針ほど、麻酔注射なしで縫合して、「充分食事を摂取せよ」で終わりでした。入院後約二時間ほどにあった言葉は脳裏に残っていましたが、その後何時間かは不明です。眠っていたそうです。

病院も糧秣不足で、飯盒のほどに三分の一ほどの食事でした。それでも一日三食ですから天国のようでした。二、三日で体調も良くなり、体温も平熱になり、左腕を固定しただけで行動は充分に出来るようになり、衛生兵の手伝いを行いつつ食料の収集に動き廻りました。

約二ヵ月経過した八月二十日、戦争終結を知らされ、数日後豪軍兵士が来て武装解除と言いますが、戦線病院には武器は一切なく、至極簡単に武装解除は終わり、この地区に残留せよとのことでした。以来豪軍将校がジープで一週間に一度見廻りに来るだけで、食料は豪軍の乾パンとコンビーフでした。九月十日頃に初めて「日本は無条件降伏したのだ」と知らされ愕然としました。

「自然の原野　キロ四方が収容所である。これより他所への移動を禁ず」が豪軍からの命令でした。脱走しても船が無いと日本へ帰ることは出来ぬと、すべてをあきらめて周辺を散策しながら食用の野草探しをし、腕の傷も快方に向かいました。この時期には日本内地の情報が種々入って来ました。畑を耕して農作物、特に芋類の栽培をしたりしました。時は昭和二十一年の春でした。貴重な青春の一時期をこのような状態で過ごすことは残念でした。

五月頃に「復員船が来る」の情報が入りライン河（詳細不明）方面に集結の命令が来ました。五月二十八日、リバティー型輸送船に乗船しました。現地名サマリンダで日本軍は「鐘木」というところでした。

六月六日、名古屋港入港、即上陸、三菱航空機の倉庫に泊まり、至極簡単な検疫がありました。翌七日に復員式を行い、引き続き「諸手続き完了次第解散せよ」でした。自分は持参軍票八十円を提出し、引き換えに新円で百五十一円を受け取りました。

加古川線西脇駅までの切符と外食券四枚と乾パン三袋を受領して、満員列車で大阪まで帰りました。見るも無残な焼け野が原にバラックが建ち、鎚音高く建設の最中でした。道修町の会社へ立ち寄りました。完全に瓦礫と化していると思っていましたが、大阪の真ん中の街なのに会社は不思議にも焼けることなくありま

した。社長にお会いし帰還報告と御礼を申し上げました。

社長には「即出勤してくれ」と言われ、私も嬉しく二つ返事で答えましたが、「一度故郷に帰って出直して来ます」と挨拶して田舎へ帰りました。そして皆に元気な顔を見せ、世間様に御礼を言上しました。一週間ほど休み体力を付けて大阪へ出ましたが、つくづく戦争はすべきでないと感じている今日この頃です。

元アメリカ駆逐艦
第一〇二号哨戒艇に救われる

石川県　村田武一

一　元アメリカ駆逐艦「スチュワート」の生涯

哨戒艇は、大東亜戦争中第一、二号、第三十一～三十九号、第四十六号、第一〇一～一〇九号が各種作戦に就役した。

このうち第四十六号までは、旧海軍の二等駆逐艦を、第一〇一号以下は敵国からの戦利艦であった。したがって、最初から哨戒艇目的で造った艦はないのである。

私達第十一号海防艦（以下「海十一」と略す）の生き残りの者約二十人が、昭和十九（一九四四）年十一月二十五日マニラ～高雄間を便乗した第一〇二号哨戒艇は、元アメリカ駆逐艦「スチュワート」であった。昭和十七年三月八日ジャワ島のオランダ軍が日本軍に降伏した。同日、日本軍はスラバヤを占領し、沈没した乾ドックで、左舷に大傾斜していた「スチュワート」を捕獲したのである。

この艦は、大正八（一九一九）年九月九日民間造船所で起工され、翌年三月四日に進水し、同年九月十五日に就役した。最初は沿岸警備であったが、大正十（一九二一）年十月十二日大西洋駆逐戦隊に編入されカリブ海で艦隊演習を終了し、小修理を施工、大正十一（一九二二）年六月二十日アメリカ海軍アジア艦隊に編入され、地中海、インド洋を経由しフィリピンに到着した。その後「スチュワート」は二十四年間一度